

だからといって、お金の使い方を含めた生活スタイルを守備だけに徹して、攻撃的な好奇心の芽生えを封印してはいけないが、第二の人生も、仕事の進め方と同様に、自分なりのタイムスケジュールと予算の管理が欠かせない。

**自分が長期的、中期的、短期的には何をしたいのか？**

定年後は、それを考えるべきだ。

私はといえば、**80歳を過ぎたいまでも「週に四日はオフィスに出る」「家が嫌い」「月曜日が待ち遠しい」という日々を送り、常に「なんか面白いことないか」と考えている人間である。**

ある編集者から聞いた話だ。

彼が奥さんと、神田の有名なそば屋に行ったときのことだという。40年以上も前の話だそう。二人でメニューを眺めて、ひとしきり注文をして一献傾けていたら、突然奥さんがこう切り出した。

「ねえ、あなた覚えてる？ はじめてあなたのお母さんと会ったのって、おそば屋さんだったのよね。そのとき、私はきつねそばを頼もうとしたんだけど、お母さんが天ぷらそばを頼んだもんだから、あなたに『じゃあ、君も天ぷらそばでいいよね』っていわれたの。本当はきつねそばが食べたかったのよ……」

彼にしてみれば、当然そんなことなど覚えているはずもない。それどころか、3人でそば屋に入ったことさえ記憶にない。

しかし、そんな彼が口にしたのはこんな言葉だそう。

「ああ、覚えているよ。そんなこともあったね。あのときは、オフクロが強引で悪かったね。申し訳なかった」

私が編集者としての能力を評価するだけの男である。これが正解中の正解。まさに最適解である。

「そんな昔の話をいまさらしてどうするんだ」

「そんなこと、覚えているはずがないだろう」

「いつまでも昔話を持ち出すんじゃないよ」

もし、そんなリアクションをしていたらどうなっていたらだろうか。私は尋ねてみた。

「まず、三日は口をきいてもらえなかったでしょうね」

私は、ジム通いなどはしていないが、とにかく歩く。

自宅から最寄り駅まで15分。電車に20分乗り、徒歩10分の事務所へ最低週4日は通うようにしている。とにかく歩くのが健康にいいはずだという信条だからだ。

たとえば「遅刻ばかりする」「なんでもペラペラしゃべる」「平気で嘘をつく」これは短所でなくて欠陥だ。こういう人間には毅然とした態度を取るべきである。